

闇の燭台
山本道子



闇の燭台

工業学院図書館
蔵書章

闇やみの燭しょく台だい

印刷 一九九〇年一〇月五日

発行 一九九〇年一〇月一〇日

著者 山本道子やまもとみちこ

発行者 佐藤亮一

発行所 株式会社新潮社

162 東京都新宿区矢来町七一 振替東京四一八〇八

電話 業務部03(266)五一一一 編集部(266)五四一一

印刷所 大日本印刷株式会社

製本所 株式会社大進堂

©1990 Michiko Yamamoto Printed in Japan

価格はカバーに表示してあります。

乱丁・落丁本は、ご面倒ですが小社通信係宛お送り下さい。送料小社負担にてお取替えいたします。

ISBN4-323407-5 C0093

闇の燭台

起き抜けに冴子はかならず窓の外を見る。ガラス越しに見えるものは、すぐそばの八手の繁みと犬小屋の赤い三角屋根と、手狭な庭にあれもこれもと植え込んだ緑のかさなりである。しかし冴子がどうしても見てしまうものは、見飽きた庭なんかではない。

視線を空に放つと、視界をいっぱいに塞ぐものがある。通りを越えたところに、つい先頃完成したビルディングである。人間が住むマンションだということはわかってはいるが、その高層住宅はいやに思わせぶりの凝った姿をしていて、住宅というよりは新しがりのミュージアムのような印象がある。

階層が八階と五階の二段仕立てになっているところを見ると、日照権などの不都合があったのかもしれない。真向いの眺めは五階の屋上にあたるところに、ミニガーデンらしい緑の造園地帯が前面に溢れている。その緑地帯の奥に更に六階七階八階とベランダが張り出している。ビルディングの外壁が、煉瓦造りで全体に落ち着いた雰囲気を見せている。

いか、建物の側面から見ると二段構えがことさらどっしりした安定感を見せている。どことなく厚かましいまでに、風格を誇示しているように見えないこともない。

そのビルディングは、完成するまでに数年を要した。旧い住宅を取り壊してから造成して新地になるまでの年月を数えると、もっとかかったかもしれない。しかし冴子が知っているのは、鉄骨の足場が組まれたあたりからで、眼の前にはいつも青いビニールシートですっぱり覆われたそれが、いかにも不安定で巨大な障壁としてそこにあったということになる。

「あそこになにが建つのかしら」

この寝室で眼覚めて窓のカーテンを開けたとき、冴子はベッドの敬夫に訊ねた。左門の家へきて最初の夜を過ごした翌朝のことであった。

「昼間はうるさいんでしょうね」

敬夫が毛布を被ったままにも応えないので、彼女はひとりで喋った。

「いやだわ、わたしたちの寝室のまん前が建築現場だなんて、ここまでは気がつかなかったなあ」

敬夫と夫婦になつてはじめて口争いになったのはこのときだった。それまでに何度かこの家に来たことはあったのに、どうして気がつかなかったのだろう、と冴子はいった。

「じゃあ、なにかい、この部屋が気に入らないのかい」

敬夫が頭をもたげて冴子を見た。

「あの工事中のビルがあると知ってたら、ここへは来なかったっていうのかい」

「そんなこといつてないわよ、これまで、何度もこの家へ来てるのに、どうしてあれに気がつかなかったんだろうっていつてるんじゃないの」

「気がつかないほうがおかしいんだよ、あれはいまに始まったわけじゃない」

「だって一度もこの部屋を見せてくれなかったじゃないの、この家はあれとは道路をはさんで背中合せなんでしょう、わたしがいつも通されたのは居間とあなたの勉強部屋だけなもの」

「トイレの窓からはまる見えだぞ、風呂場からだって」

「とにかく、わたしはたつたいま、はじめてあれにお眼にかかりました」

「だからどうだっていうんだよ」

敬夫がからだを起こした。パジャマがはだけて裸の胸が剥き出しだった。

どうしてあのような口争いをしたのだろう。冴子にはちよつと忘れられない場面である。そして、なにが忘れられないのだろう、と思う。だからどうだっていうんだ、といいながらがばっと起きあがった彼の顔と裸の胸と、肩にかかっていたくしゃくしゃのパジャマか。

いや、そんなことではない。忘れられないのは、わたしがはじめて浴びせられた敬夫の苛立ちだ。新婚の初夜明けにあの騒ぎだ。もつともわたしたちのは初夜とはいえないけど……。

とにかく夫婦というものになった最初の朝、建築中のビルディングが二人の間に割り込んできたのはたしかだった。そのときから冴子は寝室の窓からそれを見ない日はなかった。あれは完成という日のために、じりじりと成育することをやめなかった。そしていま完全な姿になって、威風堂々とそこにある。

夫婦はそのとき以来、問題の建物について話題にしなかった。しかし眼と鼻の先でそれは絶えず活動をつづけていたのだ。いつてみれば彼らにとって外界で進行しているひとつの社会的な事柄にすぎなかった。しかしそれが自分たちにとって鬱陶しさをとりこして、奇妙な禁句にさえなってしまったということに、冴子自身愕くのである。

完成してからたいして日も経たないうちに、ほとんどのベランダに夜の灯がともった。このところ冴子は、ひとり寝の夜はその建物を眺めながら過ぐす。部屋の電灯をすっかり消して、遮光のカーテンを開け放ってマンシヨンの灯を数えながら眠りにつく。いつまでも暗い窓もあれば、宵の口から眩いばかりのベランダもある。しかしたいいていの窓は、ちいさな灯がつつましげにベランダの奥にともっている。

まるで夜空の星をこどもが数えるように、冴子はそれらの光に永遠の距離を想定して見る。彼女にとって他人の灯は星屑とおなじようなものだ。この家で敬夫と暮らすようになってから、いったいなにをしたかといえ、世間を星屑のように無縁の彼方に押しやって、ただひたすら射程距離を家のなかにとどめていた。それはいったいなんのために。わたしはなにをしているのか……。敬夫の姉の緋沙をまじえた左門の生活は冴子にはわけのわからないものだ。

「敬夫さん、あなたたちどうしてこどもができないの、欲しくないわけじゃないでしょう」

緋沙が食後の煙草に火をつけながらいつている。日曜日の夕飯でも彼女が家をとるなど滅多にないことだ。

「親しくしてる学者がいうには、最近の傾向として、子持ちになりたがらない女の一群っていうのがあるんですってよ、こないだちょっとびっくりさせられたんだけど、古文の助手やってるひとが、いつのまにか出産したっていうのよ、近頃のひとはなんでもすることが早業だから、あつというまの水際だった芸当見せつけられちゃったってわけ、彼女も子持ちになりたくない組かと思ってたから、びっくり仰天よ」

「姉さんの同僚なの、そのひと」

敬夫とは五歳齡がはなれている未婚の緋沙は、母校の私立大学の図書館に勤務している。

「うん、シングル」

「何歳」

「あなたたちより若いんじゃないかなあ、三十は出てるかしら」

「三十二、三か、ちょうど欲しくなる頃だな」

「そうかしらねえ、わたしなんかなんにも考えないうちに通り過ぎちゃったけどね」

「姉さんは特別だよ、男嫌いなんだから」

敬夫の変な高笑いで、その会話はそこまでだった。

どうしてこどもができないのかという、緋沙の問いはそのまま立ち消えになってしまったが、台所で食器をかたづけながら、冴子は敬夫の応えをあれこれと頭のなかに張りめぐらしていた。

——どうしてできないかっていったって、こればかりは授かりもんだろう。

——そんなことは冴子にきいてみてよ。

——それがよくわかんないんだよ、冴子はどう考えてるか知らないけど、そのうちなるようになるだろうっていうのが、正直なところかな。

——さあ、どうしてだろうねえ、欲しくないとはいえないと思うよ。

——いまさら遅いんじゃないかなあ、もう三十五だよ、ま、うかうかと乗り遅れたってとこかな。

冴子は緋沙が立っていった椅子を、テーブルの下にかたづけた。そして緋沙が使用した灰皿を見た。

「緋沙さん、どうしても禁煙できないのね」

「ほっときゃいいんだよ、心配するだけ老けるよ」

敬夫が椅子を立ちながらいった。

「心配なんかしてないわよ、汚れた灰皿をひと任せにするからいやなの」

「ほっとけば自分でかたづけるよ」

冴子は、吸い殻を生ごみと一緒にして、外に置いてあるポリバケツに投げ入れた。そして台所から出たついでに、シロの小屋を覗いた。シロはスピッツの毛並の混じった白い小型犬だった。仔犬のときは家のなかで飼っていたのを、緋沙が嫌うようになってから犬小屋をあてがって外飼いにしている。

「犬なんか相手にしないで、こどもをつくれればいいのに」

緋沙がそんなことをいったのは、敬夫が友人からシロを貰ってきたときだった。生後二週間ほどで、まるで縫いぐるみだった。

緋沙は敬夫にはなんでもあけすけに喋るが、冴子にはいくらか加減しているところがある。そのときも敬夫にむかつてそういった。

「ペットなんか飼うと、妊娠したとき神経つかうわよ、なんとかっていうペットの寄生虫が、人間の胎児に深刻な影響をおよぼすっていうから」

「そのときはそのときだよ」

敬夫がそんなことをいったのを冴子は憶えている。そのときはほんとに近い将来妊娠するような気がした。もしそうなったら、この可愛い縫いぐるみのシロをどこかにやってしまわなければならないのだ、と思った。そんなことができるだろうか、知らないひとに貰われていくシロなんて、ちよつと考えられない。いつそ緋沙さんがシロを連れてどこかへ行ってくればいいのに……。

しかしシロがきてから、もう三年になる。あのときから、この家の状況はなにひとつ変わらない、と冴子は思う。変わったのはシロだけだ。

シロはどんどん大きくなって、もう縫いぐるみの愛らしさはない。りっぱな犬になって、小柄とはいっても冴子が抱きかかえるのは楽じゃない。おまけに成長して外にだされてしまった。家のなかにいたときは、夫婦の寝室がシロの寝場所だった。ベッドのすぐ脇でいつも敬夫と冴子に代わるがわる話しかけられながら眠った。そして冴子とはときどきシロの

寢言に起こされたりもした。

緋沙がいつからシロをいやがるようになったのか、冴子はその頃のことはわりとはっきり憶えている。去年の梅雨どきだった。

「犬を外へだしなさい、うちのなかで飼わないで」

緋沙はいきなり声を顫わせてそういった。

「けものの臭いが鼻について病気になるそうだわ、冴子さん、この梅雨どきによく平気ね」

敬夫もその場にいた。それにもかかわらず彼女のことばが自分にむけられていると知って、冴子は飛びあがった。緋沙が直接冴子にむかって、高飛車に注文をだすことなど、それまでなかったことだ。よほど虫のいどころが悪かったのだろう。シロはそれ以来、夫婦の寝室の窓の下に、小屋を据えられて繋がるようになった。

あの梅雨の季節に、緋沙になにかあったのだと冴子は睨んでいる。おそらく男との別れがあったのだ。それも何人めかの。

緋沙にしても好んで弟夫婦と一緒に住んでいるわけではないだろう。しかし彼女の知るかぎり、緋沙はいちども出ていく気配を見せたことがない。ただ冴子が来た当初は、さすがに新婚夫婦との同居は居心地がよくなかったとみえて年中外泊していた。どこかに寝泊

まりする部屋でも用意してあるのではないかと、冴子は思ったほどであった。ふた言めには敬夫に男嫌いといわせたりする緋沙が、冴子にはよくわからない。

この姉と弟は大層仲がいい。冴子にはそう見える。彼らはじつに多くのことを交しあう。冴子はその場にいてもいなくても、話題の種がきくということがある。

「ママがいつてたじゃないの、ほら、夏に旅行はするものじゃないって、あのときのことよ、あんたが中学のとき虫垂炎患って死ぬほど痛がったのも九州一周の旅先だったし、パパがカナダへ出張して、帰るなり激症肝炎って誤診されたときだって、ビクトリアで生蠔食べたっていったら、お医者に早トチリされちゃって、あれも夏だったでしょう、そんなことがつづいたものだから、夏の旅行は命がけだって、いま思えばママったら、ずいぶん用心深いひとだったわね、臆病というか……」

「そうだな、そういうえばそれほど好きじゃなかったんだなあ、外食も好きじゃなかった」

「そう、どんな高級レストランでも、よそのひとが作った料理は安心できないっていうんだから」

「料理に自信があったからじゃないかなあ」

「とにかく、うちのなかでこそそしてるのがいちばん好きだったみたい、この家が好き

だったのよ、パパに間取りを任されたっていったから、自分の作品みたいに思ってたんじゃないの」

「そうだね、いつも家のなかにいるひとだったね」

「ここが、ママの城だったのよ、考えてみれば、つましいひとだったわよね」

そんな話になると彼らはいつまでも話しこむ。

夕食後、気のせいかもしれないが、冴子が流しの前に立つと、緋沙の声に張りがでる。

カウンターで仕切られた台所で、洗いものをしている自分にも聴かせたいためだ、と冴子は思っている。それというのも、冴子が日頃から彼らの会話にさほど関心を示さないでいるのが、緋沙に潜在的な不満を与えていることがわかっていいるからだ。冴子自身、どうしてわたしはあのひとたちの話題に興味をもてないのだろう、と思う。彼らが繰り返している親しように話しこむ両親のこと、祖父祖母のこと、そしてその周囲を幾重にもとり巻いている親類縁者たちのことや、知人たちのこと。それらはまぎれもない左門家の歴史である。ことに緋沙のそれに拘泥^{こだわ}るようすには、黙って小耳にはさむ程度の冴子にも、どこか出口のない脈絡への回帰を感じさせるものがある。

敬夫はそんな緋沙に適当につきあっているように見えるときもあるが、たいていの場合、彼らだけの特別詔えの話題に熱中している向きもある。おそらく彼ら姉弟にとって、そん

なふうに家系の真ん中に位置を占めることの心地の良さを、確かなものにさせたもののひとつに、敬夫の結婚があるのだと、冴子は思うのである。もちろん彼らの両親の死がつづいたこともあるだろう。しかしなんといっても冴子という新参者を意識することによって彼らは、強烈に親族という内側への回帰を思いだしたにちがいないのだ。

冴子は敬夫の父親は知らない。商社の役員だったという父親は彼が大学二年のとき病死した。しかし後に死去した母親の多恵には、なんどか会ったことがある。いずれも病床を見舞っただけであった。

冴子が多恵に紹介されたとき、肝臓を患っていた彼女は、すでに末期状態にあった。敬夫は多恵の生きているあいだに挙式する算段で、準備を進める考えだった。しかし緋沙はそれに賛成しなかった。病名を告知されていない母親のために、挙式の日取りを先き延ばしにすることが、せめてもの思い遣りではないか、というのだった。病床に縛りつけたまま事をすすめるということは、息子の結婚式に参列しなければならないという母親の未来への希望を奪うことになるのだ、というのが緋沙の言い分であった。

多恵は敬夫の結婚に心を砕きながら死んでいったわけであったが、それでよかったのだ、と緋沙はいう。その後すぐにふたりは結婚したが、冴子には自分たちのそれが、病氣の多恵のために成立させられてしまったような、割り切れない思いがのこっている。敬夫の強